

『#佐伯警部の推理』（佐々木譲著）を読んだ。著者は北海道生まれ（三女と同じ月寒高校出身）。『鉄騎兵、跳んだ』でオール讀物新人賞受賞。『エトロフ 発緊急電』で日本推理作家協会賞、山本周五郎賞、日本冒険小説協会大賞を受賞。『武揚伝』で新田次郎文学賞を受賞。『廃墟に乞う』で直木三十五賞を受賞。

本作は、佐伯宏一警部シリーズ第二弾（残念ながら第一弾は未読）。重大事案の検挙実績で道警一だった札幌大通署の佐伯宏一が、それまで受験すらしなかった警部昇任試験を受け合格、警察大学の研修を経て、本作では函館方面本部捜査課に警部として着任したところから始まる。佐伯が着任した二週間後、青函フェリーターミナルの北側、工業団地の岸壁から変死体が上がった。佐伯は早速、検視解剖が行われている病院に向かうことになる。馴染みの函館の地名や病院、建物がでてくる。

奇抜なトリックも意外な犯人も出てこない。警察の地道な捜査が綴られてゆく。つまり、警察全体で捜査をしているのだ。犯人たち（被害者の家族）を警察の捜査でじわじわと追い詰めていく。実際の殺人捜査はこんなものかもしれない。

日本の殺人事件の約半数は家族・親族間で発生しており、家庭という「密室」での悲劇が社会問題になっている。

家族が関わる殺人事件の統計的特徴

- ・割合の高さ：近年の警察庁統計では、殺人事件のうち約 45～47%が親族間で発生している。
- ・件数の推移：殺人事件全体は減少傾向にあるものの、家族間殺人は年間 400～500 件で横ばい。そのため比率が上昇している。
- ・関係性の内訳：加害者と被害者の関係は、配偶者が最多（約 30%）、次いで親（約 27%）、子（約 22%）。
- ・背景要因：老老介護、経済的困窮、DV、精神疾患、孤立化などが典型的な要因として挙げられる。

代表的な事件例

日本では「一家殺傷事件」として記録されるケースが多い。

- ・津山事件（1938 年）：村人 30 人を殺害した戦前の大量殺人。
- ・世田谷一家殺害事件（2000 年）：一家 4 人が自宅で殺害され、未解決のまま社会的関心を集め続けている。
- ・大牟田 4 人殺害事件（2004 年）：一家が金銭トラブルを背景に親族を殺害。

## 社会的背景

- ・核家族化と地域社会の希薄化：大家族や地域共同体が持っていた「緩衝材」が失われ、家庭内で問題が閉じ込められる傾向が強まっている。
- ・「家の恥は外に出さない」文化：家庭内トラブルを第三者に相談せず、事件化するまで放置されるケースが多い。
- ・介護や依存関係の歪み：親の過干渉や子の依存が長期化し、心理的圧力が事件に発展することもある。

本作のような「家族の中での犯罪」は、現実の日本社会でもきわめて高い割合で存在しているようだ。家族という最も近い関係が、支え合いではなく孤立や圧力の温床となると、悲劇が生まれる。

評価：★★★★☆☆